
小陽

コノエイクノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小陽

【Nコード】

N4869E

【作者名】

コノエイクノ

【あらすじ】

田舎町の並木道。平凡な道なのに、好きな人間と歩くとどうしてこんなに綺麗なんだろう。幸せをもう一度考えたいくなる物語。（多分……）

陽が沈むまで、後少し。山から微かに覗く陽が、弱々しくもしつかりと世界を照らしていた。もうすぐ夜がやってきて、すぐに朝がやってくる。それは変わる事なく、世界の当たり前として繰り返されていく事で、その当たり前前に逆らうには、俺の存在は小さすぎて

「ねえ、覚えてる？」

丘の上に高校が見える、すぐ側の並木道。道を挟むようにして植えられているのは田舎町の名物『千本桜』。春になれば綺麗な桃色の花を枝に付け、平凡な道を色鮮やかに彩る。しかし今は緑の葉が生い茂っているだけで、彩りも何もあつたものじゃなかった。気が付けばもうすぐこの町にも夏がやってくる。

彼女の大好きな夏が。

「何を？」

「五年前、私があの街に行っちゃったの、今日なんだよ？」

細く長い手を包み込むようにして握り歩いていた俺の横、頭一つ分違う身長 of 彼女が見上げるようにして俺を見た。まだ幼さが残る顔には、笑顔が浮かんでいる。

「ああ……そう、だっけ？」

五年前。俺達はまだ情けない高校生で、そのくせ意地っ張りで、俺だけが、素直になる事が出来なくて。彼女は大きな病気を抱えて

いて。

今でも思い出せる、あの駅のホームでのやりとり。それまで時間はたっぷりあったのに、素直に慣れたのは何千時間の、たった数分だけだった。あの時の情けない自分。今では懐かしく思える。

「電車が来るちょっと前にさ、ギュッてしてくれたじゃない？あれ、すっごく嬉しくて、『ありがとう』って言いたかったけど、恥ずかしくて言えなかったんだ」

照れくさそうな声が、耳をくすぐる。何となく彼女の顔が見れなかった。俺の顔がきつと真っ赤だから。彼女もきつと、真っ赤だから。

「懐かしいな」

「懐かしいね」

照れくさくて、それ以上の言葉が出なかった。その代わりに、握っている手に俺も彼女も少しだけ力を込める。もう二度と離さないように。もう二度と離れないように。

彼女が帰ってきたのは、二年前。生きる時間を少しだけ伸ばして帰ってきた。抱えていた大きな病気は取り除いたものの、元から身体の弱い彼女は他にも多くの持病があり、またいつ倒れるかわからない状況なのだ。

「暑くなつたな」

「だねえ」

それでも、この二年元気にやってきた。何の根拠もないけれど、これからもうまくやっていけそうな気がする。

「帰ったらご飯作るよ」

「カレー食いたい」

「分かった」

優しい風が一つ吹き、それを待っていたかの様に顔を合わせて両者とも照れくさそうに笑う。

いつの間にか陽は沈み、俺達は握る手を離して、腕を組む。

「俺もさ、お前が行っちゃった後、ずっと泣いてたんだ」

「泣いてたの？」

「通勤ラッシュで人がいっぱい来てるのに泣いてさ。あん時は笑われたなあ」

彼女が行ってしまったあの日、俺はずっとあの泣き崩れた場所から動くことができなかった。嗚咽を我慢せず、涙を拭くこともせず

に。

「さっ、早く帰るかっ！」

照れくさくて、鼻の頭を空いている手で軽くかき、彼女を半ば引っ張るようにして歩みを早める。

しかし、彼女は逆に歩みを止めてしまった。その拍子に組んでいた腕が離れた。

「お——」

「私、君を好きになってよかったよ」

一瞬ハツとして、そして、次の瞬間には全身が熱くなった。

「後、何年生きられるか分かんないけど、君の側に居るね。もう何処にも行かない」

山の間から少し見える夕陽をバックに微笑む彼女が、素直に綺麗だと思えた。その思う事が、素晴らしく素敵な事だと思えた。

「……何か、ズルくない？」

「女の特権なのですよお」

彼女は俺の腕を取り、嬉しそうな鼻歌を交えて歩き出す。

陽が沈む。照らしてくれてありがとう。彼女を美しく照らしてくれてありがとう。また明日。

大好きな彼女と仲良くこの田舎町でお待ちしております。

END

（後書き）

.....（土下座）

日本語、勉強し直そうかなあ……なんて思ってます（泣）
えと、お見苦しい駄文だったでしょうが、最後までありがとうございます（泣）
いました（土下座）いかがだったでしょうか？一応、『大好きと言
える幸せ』の後日談となっております（子供いねえじゃんという突
っ込みはなしでっ！）。皆様が鼻で笑っている姿が見えます……。
どうぞ笑ってやって下さい。バカにしてやって下さい。そして、優
しい気持ちになって下さい。それが、コノエの原動力で御座います
（笑）

……偉そうだなあ……
……ご意見、ご感

想など、お待ちしておりますっ！！

では、また。

コノエイクノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4869e/>

小陽

2010年12月2日01時53分発行